

# 増渕恒吉国語教育論の研究

——昭和20年代前半を中心に——

山 本 義 美

(武庫川女子大学文学部教育学科)

## A Study of Tsunekichi Masubuchi's Philosophy and Practice of Teaching the Japanese Language at High School in Post-War Years

Yoshimi Yamamoto

Department of Education

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

This study was to clarify Mr Tsunekichi Masubuchi's view of the high school course of study in the Japanese language ; problems, objective, contents, methodology, and college entrance examinations.

Mr Tsunekichi Masubuchi was the supervisor of the Tokyo Board of Education from the 32nd year of Showa till the 37th year. It is historically important to know how he tried to formulate the high school course in the Japanese language close to the time when the Ministry of Education issued the official curriculum outline for the Japanese language at public high schools.

The author investigated five articles that Mr. Masubuchi published in the 25th and 26th years of Showa and found out, among others, that Mr Masubuchi strongly emphasized the importance of developing the ability of language activities on the part of students.

### はじめに

本稿では、まだ、高等学校学習指導要領の発行されていなかった昭和20年代前半において、増渕恒吉氏が新しく制度化された高等学校の国語科の抱える問題点をどこに見いだし、目標をどこに置き、どんな内容をどんな方法で指導しようとしたか、また新制高等学校国語科教育実践者として、大学入試に対してどんな考えを持っていたかを明らかにしたい。

増渕恒吉氏は、昭和21年4月、東京都立第五中学校（現東京都立小石川高等学校）教諭として、新しい国語教育のスタートを切った。昭和24年10月、東京都立第一新制高等学校（現日比谷高等学校）に移り、昭和32年4月、東京都教育委員会指導主事、昭和37年、東京都立航空工業高等専門学校教授、昭和43年専修大学教授、昭和53年土浦短期大学教授を歴任した。

この間、昭和23年4月から昭和46年3月まで、文部省学習指導要領作成委員を委嘱された。

考察の対象として、次の論稿五つを取り上げた。

I 「国語教育の諸問題」『高校教育』昭和25年1月1日発行

II 「高等学校国語学習指導の諸問題」『実践国語』昭和26年3月1日発行

Ⅲ 「高等学校国語科のカリキュラム」『国文学解釈と鑑賞』昭和25年8月1日発行

Ⅳ 「高等学校国語の教育課程」『国語教育講座3』刀江書院 昭和25年11月30日発行

Ⅴ 「国語科大学入試問題への要望」『高校教育』昭和25年11月1日

Ⅰ、Ⅱは当面解決しなくてはならない諸問題に関する論稿、Ⅲ、Ⅳは目指すべき教育課程に関する論稿、Ⅴは新制高校国語教育実践者として大学入試に対する要望を述べた論稿である。

## 1 新制高校国語科の教育課程の問題

増渕恒吉氏は、前掲論稿Ⅰ「国語教育の諸問題」において、発足間もない新制高校の当面する主要な問題として、古典の扱い方、文学の指導、選択国語の内容の問題などを指摘し、特にカリキュラムの問題と単元学習指導の問題を重点的に取り上げている。

### 1 国語科の目標

#### (1) 国語科の一般目標

当面している問題の一つとして教育課程に関する問題があった。どのような国語科のカリキュラムを作るべきか、カリキュラムを作るにしても、新制高校国語科の学習目標をどこに置くべきなのか、まだはっきりしていなかった。当然のことながら、小学校、中学校、高等学校の国語科に共通する一般目標も定まっていなかった。

増渕恒吉氏は、国語科の目標は、当然のこと教育基本法、学校教育法に照らして考え出されなければならないとして、「日常生活に必要な国語を理解し、また発表する能力を養い、いきいきとした言語生活を営ませることによって豊かな教養を持つ人間をつくり、民主的な社会の成員たるにふさわしい資質を養う。」<sup>1</sup> 点にあると述べている。氏はまた、聞く・読む・話す・書くの言語活動の好ましい態度や習慣を養い、その知識と理解を増し、技能を磨くことが重要な学習指導の仕事となると述べている。日常生活に必要な言語の教育によって、民主社会の担い手を育てることが国語科の目標であるとしている。文学、文法の学習は、言語生活の態度習慣を養い、技能を磨く学習内容を支えるものと考えられた。

#### (2) 新制高校の国語科の目標

国語科の一般目標が上記のようであるとすれば、高等学校の国語科の目標として何を設けるべきか。増渕恒吉氏は、次のように述べている。

「民主的な平和国家の成員たるにふさわしい人間を形成するため、小学校や中学校の国語学習の基礎の上に立って、日常生活に必要な国語を正しく理解し、また発表する能力を養い、国語を通して情操や思想を豊かにし、批判力や教養を高めるのが、新制高校の国語科の目標である。」<sup>2</sup>

上のように設定された目標のうち、「民主的な平和国家の成員たるにふさわしい人間を形成する」は、教育基本法第一条をふまえており、「小学校や中学校の国語学習の基礎の上に立って」は、学校教育法四十一条をふまえている。

また、前掲論稿Ⅲ「高等学校国語科のカリキュラム」において、目標にふれて、次のように述べている。

「平和的な国家及び社会の成員たるにふさわしい民主的な人間を形成するために、小学校や中学校の国語学習の上に立って、話す・聞く・書く・読むの四つの力、およびそれらを有効にはたかせるための文法等の言語技術の訓練と文学の学習をさせることが高等学校国語科の目標である。」<sup>3</sup>

高等学校の国語科の目標は、言語能力の習得、言語技術の訓練と文学の学習にあるとしている。能力・技能を育てる言語教育、人間形成を目指す文学教育が重視されているのである。

#### (3) 具体的な学習目標

増渕恒吉氏は、新制高校三年間の国語学習を通して、どれだけの力をつけなければならないかを考えられた。学年別にグレードをつけるのはむずかしいが、その必要もないと断わりながら、次のように挙げられている。

##### a 話し方・聞き方の目標

増渕恒吉氏は、「ややばく然としすぎているきらいがないでもないが」<sup>4</sup>と断わり、「話しことばの訓練を

国語の目標としてははっきりかかげることは、大きな進歩であり、改善である。」<sup>5</sup>として、次のように高等学校における話し方・聞き方の目標を挙げている。

- ① 長い話の要点がとらえられる。
  - ② 大ぜいの意見の異同がとらえられる。
  - ③ 人の話の真意がつかめる。
  - ④ 筋の通った話ができる。
  - ⑤ まとまった意見が発表できる。
  - ⑥ いろいろな会で司会ができる。
  - ⑦ 劇や映画の鑑賞や批評ができる。
  - ⑧ ラジオ放送の有効な聞き方ができ、批評ができる。<sup>6</sup>
- ①、②、③は、聞き方についての学習目標である。

①は、校内講演会などが学習の場となる。②の「大ぜいの意見の異同がとらえられる」ためには、自分の意見でまとめながら聞かなくてはならない。③の「人の話の真意」をつかむためには、人の話に耳を傾けて虚心に聞く態度が養われていなくてはならない。④、⑤は互に関連している。筋の通った話ができ、まとまった意見が発表できるためには、文法的に習熟させる必要がある、また書くことの学習と関連して、文の構成力を増す学習が必要になってくる。②、⑧は、従来の国語教育では、取り上げられなかった国語科の目標である。しかし、これらは社会科や理科においても学習の対象となるが、国語科としては特に言語的要素に主眼を置いて指導がなされる。

「話し方・聞き方」を一項としているところに、言語生活本意の分け方から、学習指導本意の方向が見られる。しかし、これらの指導法は従来未開拓であったため、指導には特に工夫が必要であると述べている。

#### b 書き方の目標

- ① 筋の通った文章が書ける。
- ② 目的に応じて手紙や実用文が書ける。
- ③ 論文を書いたり、創作したりすることができる。
- ④ それぞれの場合に応じた効果的な表現ができる。<sup>7</sup>

①は、中学校で学習した国語の文法、文構造、表記法の知識を生かして、わかりやすい文、主述が正しく照応した文章を書くように指導する。

②の実用文の学習は学年が進むにつれて程度が高くなる。手紙は友好的な手紙、実用的な手紙を、相手、場合、用件などを想定して練習させる。

③は簡単な論説・論文の書き方を高学年において学習させるが、程度の高いものを望むのではなく、論述の基本的な手続きや意義について学ばせ技能を身につけさせる。創作についても一律に創作の経験を与えるのではなく、素質を持っている生徒を伸ばすよう計画する。

④は必要に応じて、文章のスタイルや形式を変えて書く能力をつける。そのほか、「ノートやメモの取り方」「自分の考えを自分のことばで表現する」「書写上の誤謬や文章の良否に敏感ならしめる」などが指導事項として考えられている。要は生徒が手軽に筆にとって、ものを書きしるすという習慣をつけることをねらいとしている。

#### c 読み方の目標

従来の語句解釈を中心とした読み方指導は改められ、「読み方のみが国語の学習ではなくなってきたとはいえ」、<sup>8</sup>読み方は「国語の学習の中で最も重要な位置を占めるべきもの」<sup>9</sup>と述べている。また読むことを対象や目的の上から、①知識、情報を獲得するための読み、②鑑賞、娯楽のための読みに大別して、読み方指導の中心を読書技術についての指導に求めている。

読み方の目標として、次のように掲げられている。

- ① 読書の技術や態度を身につける。
- ② 論説や論文の読み方を会得する。

- ③ 現代文学の鑑賞や批評ができる。
- ④ 古文や漢文がある程度読める。
- ⑤ 古典の読み方や古典のあらましがわかる。
- ⑥ 翻訳された世界的文学に親しむ。
- ⑦ 当用漢字が完全に読める。<sup>10</sup>

①, ②は, 知識, 情報を獲得するための読みであって, いわゆる「知る」ための読みである。読むことの技術を訓練する。「読書の技術」とは, 大意をとらえるのか, 拾い読みをするのか, 情報を得るのかなどの読む目的を決め, その目的によって読み方を変え, 段落の中心思想をとらえたり, 重要な叙述を求めたりする技術である。

③, ④, ⑤, ⑥は鑑賞や娯楽のための読み, いわゆる楽しむための読みである。現代文の学習や漢文を含めた古典の学習である。

国語科担当者は, 読書指導に大きな責任を持ち, 読書指導を有効になしうよう努力しなくてはならないと述べている。

d 他の国語科の目標

- ① 文語のきまりのあらましがわかる。
- ② 国語の歴史のあらましがわかる。
- ③ 国語国字問題に関心をもつようになる。<sup>11</sup>

①は古文読解に役立つ解釈文法のあらましを学習する。②の国語の歴史のあらましを学習するのは, 選択国語の内容としている。また, ③は国語国字の問題の所在を明らかにすることをねらいとして, 高学年で取り上げる。

## 2 新制高校国語科の内容

増渕恒吉氏は, 新制高校の国語科においては, 聞く・話す・読む・書くおよび文法等の言語技術の訓練と, 文学教育とが行われるものとして, その内容を次のように示している。<sup>12</sup>

### (1) 言語技術の訓練として取り上げられる内容

#### a 聞き方の学習

長い話の要点のとらえ方 大ぜいの意見の異同のとらえ方 話の論理をたどる聞き方 人の話の真意のとらえ方

#### b 話し方の学習

筋の通った話し方 対談と座談 討議のしかた 会議の進め方 機械による効果的な話し方

#### c 書き方の学習

筋の通った文章の書き方 実用文の書き方 新聞記事の書き方 論説論文の書き方

#### d 読み方の学習

大意や要旨のとらえ方 論説論文の読み方 図書館の利用のし方と書物の選択

ここに取り上げられている内容は, 言語生活のあらゆる面にわたっており, 社会的要求に応じた国語の力が訓練されるようになっている。すべて生活上必要な力である。ここにはまた, 聞く・話す・書く・読む言語活動を豊かなものにするためには, まず「方」すなわち「技術」が必要なのだとする考えがうかがわれ, 言語経験の前の一つの段階として, 技術が考えられている。

### (2) 文学の学習として取り上げられる内容

まず「詩の味わい方」「小説の読み方」「古典の味わい方」<sup>13</sup>が取り上げられる。これらは, 鑑賞, 娯楽のための読む技術の訓練である。ついで, 作品として上代・中古・近世など古典を含め各時代の作品が挙げられ, 翻訳詩, 翻訳小説など外国の文学作品が挙げられている。読むこと書くことの学習と関連して, 詩, 随筆, 小説, 戯曲などの文学の製作の経験も与えようとしている。映画の鑑賞のしかた, 脚色と演出のしかた, 翻訳劇, 演劇論を文学の学習と関連するジャンルとしている。

また古典の学習の内容は, 低学年で取り扱うものとして, 古文の読み方, 味わい方, 作品は中世の説話文学, 万葉集, 源氏物語, 芭蕉や西鶴の作品である。さらに高次の興味を持つ者には, 選択科目で, 枕草子, 源

氏物語、万葉集、古今集、新古今集、国文学史などを学習させる。<sup>14</sup>

### 3 国語科カリキュラム作成上の留意点

国語の学習要素が科学的に究明されていない段階であり、従って学習目標も決めがたかった中で、学習計画を立てなくてはならなかった。計画に誤りがあったり、均衡が失われていたりする場合、学習の効果は上がらない。学習指導目標を実際の学習の中に織り込んだ学習指導の計画をどうすればよいかわからないという問題があった。

増渕恒吉氏は、学習指導計画を作成する場合、その留意点を前掲論稿Ⅲにおいて次のように述べている。（但し考察者において適宜まとめた。）

- (1) 社会がどんな国語学力を望んでいるのか、社会の必要に応え、生徒の興味と関心とにに応じるように作らなくてはならない。もちろん基本的な訓練は興味は薄くても行うべきである。
- (2) 「国語科の目標を学習させるのに、指導者が国語についての知識を頭から与えようとしてはならない。」とした。これは学習を展開する場合の指導法の問題である。生徒に知識を与えるのではなく、豊かな言語経験を与えて行く中に、自然と正しく好ましい言語生活の態度や習慣が付き、技能も磨かれて目標が達成されるようにし、できるだけ生徒自信の生活に結びつけて学習させるようにする。ここで、「できるだけ」と断っているのは、小学校・中学校に比べて、知識理解も多くなって来ているからである。しかし、古典の学習などについては、従来の語釈中心の指導法は反省すべきであるとしている。
- (3) 「聞く・話す・読む・書くの言語活動が一つの主題を巡って総合的に学習されるように編成されていなければならない。」と述べている。これこそ単元学習である。総合的に学習する方法が最高に能率的であると考えている。
- (4) 「他教科並びに特別教育活動の指導計画との綿密な連絡のもとになされなくてはならない。学校生活のあらゆる場面が国語学習の場であるが、特に特別教育活動は国語教育の適切な場を提供する。」とした。有機的な学習、特に高等学校においてはこのことに注意しなくてはならないとしている。
- (5) 個人差に応じる用意を持っていなければならない。高校においても個人差はある。個人差に応じた学習指導をすれば、目に見えて学習効果は上がると、分団学習実施の必要性を述べている。この分団学習は、単元学習展開の過程における一つの学習活動なのである。
- (6) 目標がどの程度達成されたか、学習が生徒の興味に合っていたかどうか、社会の要求にどの程度応じていたかなど評価の体系が考えられていなくてはならない。

以上、(1)～(6)の項は、新しい国語科学習指導計画作成上、一般的に言われていることである。特に高等学校で留意すべきは、学習指導計画が学校の特殊性に応ずること、さまざまなコースを用意して、専門的に掘り下げた学習ができるようにすること、生徒の意見を十分に反映させることなどであるとしている。

## 2 新しい国語科の指導法の問題

増渕恒吉氏は、「新しい国語科の指導計画は単元学習の形態をとることによって、もっとも有効に実施されるであろう」<sup>15</sup>と述べ、優れた効率のあがる指導法として、単元学習法を取り上げている。しかし、新しい指導法は十分に理解されないまま、古い指導法が根強く残り、古い学力観に立って、新しい指導法は批判された。

新しい指導法である単元学習の概念もはっきりしていなかったが、増渕恒吉氏が考える単元学習は、次のようなものであった。

「生徒が興味をもち、また生徒の能力に適当した話題の中で、特に社会の要求にこたえ得るようなものを選びあげ、その話題を中心として、話す・聞く・書く・読むという言語の諸活動を組織し、実際的でしかも価値ある経験を与えて、その学習の効果を合理的に評価する、一まとまりの学習が単元学習であり、その話題が単元である。」<sup>16</sup>

どんな単元を選ぶべきなのか、増渕恒吉氏は、アメリカの言語技術の例として、次のように挙げている。

「環境と人間」「思想と経験と意見」「慈悲と正義」「思想と表現」、短篇小说、文法、語いの研究など。また、本稿前出 1 の 2 で挙げた各項に対して、増渕恒吉氏は次のように述べている。

「以上の一つ一つは単元と考えてよく、人によっては要素単元または単位とも呼んでいるが、これを、生徒

との話し合いの上で各学年に配列すれば、一応の国語科の単元計画ができるわけである。しかし、こうして作られた単元は教科に即した、いわゆる教材単元中心の国語科のカリキュラムである。」<sup>17)</sup>

また生徒の関心について触れ、外面的なものより、内面的なものにあると述べている。内面的なものとは、例えば、「伝統」とか「人生の意義」とか「文芸と社会」とか「宗教と道徳」というような単元である。

単元学習を行うにしても、教科単元学習か、生活単元学習かの問題があった。増渕恒吉氏は、「現在の高等学校で、生活単元などは考えられない。場合によっては生活単元的なものをいくつか入れるのはよいが、文部省の学習指導要領の中間発表に出ているような国語科の教科に即した教材単元を主として単元計画がなされるべきであろう。」<sup>18)</sup>として、単元の統一原理を教科に求めようとしている。

単元学習には一般的に言って当時は全くなれていなかった。単元の取り扱いにあたってどのような点に留意しようとしたのか、そのことについて次のように掲げている。

- (1) 単元を展開するにあたって、「① 単元設定の理由 ② 目標 ③ 内容 ④ 資料 ⑤ 学習活動 ⑥ 評価の六つのことがらが考慮されていなければならぬ。」
- (2) 「学習は自発活動を中心としなければならないが、単元によっては、指導者が主となって学習を進めてゆく場面があってよい。単元の性格に応じ、生徒の実態に即して、型にはまらぬ柔軟性のある学習の方法をとってゆきたい。」
- (3) 「『実用文の書き方』『古典の味わい方』という単元は、異なった資料によって、各学年に繰り返されてよい。」
- (4) 「生活的な単元では、その学習によって国語のどういう力をつけるのかという目標を特に明確にしておかなければならない。」
- (5) 「一つの単元にかかる時間は、単元の種類によって当然増減があってよい。また評価によって能力の特に低いものを見出したときには、それらの生徒に対しては、能力増進のためのドリルが行われるべきである。」<sup>19)</sup>

### 3 何を国語の学力と考えるかの問題

新しい指導法によって育てられる学力は、国語についての知識だけでなく、言語活動力といった能力であった。しかし、古い国語学力の見方は、読み方を中心とした文字力であり、読解力であった。知識に焦点をおいた。この国語学力観は、社会に依然として残っていた。

増渕恒吉氏は、新制大学発足以来二回行われた大学入学試験問題を分析して、新制高校国語科担当者としての要望を述べた。

新制高校発足当時は、まだ育てるべき学力の標準が明確でなかった。従って大学側としても、何を出題の基準にしてよいのかわからなかった。そこに学力を育てる高等学校と、学力の有無を見る大学との間にギャップが生じたのに違いないと大学側の立場に理解を示している。

しかし、新しい指導法による国語科学習が大学入試に影響されることをおそれ、「望ましい出題を念願せざるをえない」<sup>20)</sup>「新制高校の教育が、大学入試のために、妨げられるようなことは、絶対にあってはならない。」<sup>21)</sup>と述べている。

昭和二六年に高等学校の国語科学習指導要領が発行されるのを機会に、大学入試問題作成者に対して、新制高校国語科担当者として、前掲論考Ⅴにおいて次のように要望している。(各項目は、考察者において適宜まとめたものである。)

- (1) 学習指導要領を十分に研究して、新制高校の国語科のねらいを知って高校国語科の現状について十分の知識をもって頂く事が望ましい。
- (2) 単に読解力を試すもののみでなく、聞くこと、話すこと、書くこと、文法、文学等、国語の力のすべてにわたることが望ましい。
- (3) できるだけ、読書の実際に即応するような出題を工夫していただきたい。
- (4) 古文の場合、解釈の問題に終わることなく、その思想とか内容、考え方や感じ方とかに触れた設問をも出して、古文読解の本質を逸脱しないような配慮があってしかるべきものと思う。

- (5) 古文の問題数が現代文に比して余り多すぎることのないようにしてほしい。
- (6) 作文については、ある条件、ある表題を与えて一定語数内の文章を書かせて、はっきりした評点基準を設けて採点するようにしてほしい。
- (7) 書写能力を試すような問題をどしどし出して、その向上を図るように刺激してほしい。
- (8) 国語国字問題に関する出題はよい。
- (9) 品詞識別の問題や文語の正誤問題は意味がないのではないか。
- (10) 文学の鑑賞力や批判力を調べる問題はまだ適切な問題が見当たらず、知識的な設問が殆どだが、新機軸を出して高校の文学教育を刺激してほしい。
- (11) 国語の力の何を検出するのかよく吟味してほしい。
- (12) 設問の用語が一般的にどのような意味に用いられているかを検討して、受験者を迷わしめないようにしてほしい。<sup>22</sup>

まず、国語科の目標に沿った出題であること、次いで出題の範囲と内容について触れ、読み中心でなく聞く・話す・読む・書く・文学・文法全てについて出題すべきことを要望している。特に、読解力を見る場合、読書技術に関する設問を含むなど、読書生活の実際に即した出題の工夫を求めている。

また、古文については、部分解釈や文法問題を用意して、古文鑑賞の基礎力を見ることは当然のこととし、解釈を問う場合、選択式ではなく現代語で書かせるべきだとしている。また思想とか内容、考え方、感じ方に触れた問があって然るべきだとしている。

作文を出題範囲として求めている。当用漢字の書き取り問題について触れ、選択式は易しすぎる、従来通りかなを漢字に改める形式にすべきだとしているところには、基礎学力としての漢字力を重視している姿勢がうかがわれる。

国語国字問題については、正しい知識と意見の有無を見る問、文法問題については、文語の正誤、品詞の識別はあまり意味がないとし、文章論の出題を望んでいる。

国語科における文学教育の占める位置は大きくなって来ているとし、ただ国文学史的な断片的知識を求めるのではなく、文学の鑑賞力、批判力の検出について一層の工夫を求めている。

全般的には、出題の範囲、出題の形式、設問用語の検討などについて注文を出し、大学に対して、新制高校の国語教育を推進するような出題の工夫を望んでいる。そこには、新しい高等学校の健やかな発展を願って、努力を積み重ねている増渕恒吉氏の姿勢、態度を垣間見ることができる。

#### 4 新しい国語教育を改善し、前進させていく方策

当面する問題をどう解決していくのか、残存する古い国語教育を改善するためにどんな手だてが考えられるのか。改善の方策についての考え方を、前掲論稿Ⅱ「高等学校国語学習指導の諸問題」において述べている。

まず、外的条件の改善として、学校設備の充実と労働条件の改善を挙げている。学校設備の充実の要求は特に、図書館の充実に求めている。単元学習が成立するためには、豊富な資料が必要であった。また外的条件整備の一つとして、受持ち時間、担当生徒数の削減を求めているが、ただ挙げるにとどめて、すぐにでも実施できる内的な改善策を次のように提示している。（但し、各項は、考察者が適宜まとめたものである。）

- (1) すべての高等学校の国語科担当者が、国語教育の動向について注意し、国語教育について研究（指導法や国語学力観などの研究）するようにしたい。
- (2) 国語学習の方法論や形態論の基礎となるべき、言語活動や学習内容の分析、標準学力の設定、能力表や経験表の作成を急ぐ。
- (3) 教材研究を広範囲にしかも綿密にする。
- (4) 言語や文学の垣間の技術的な研究がなされるべきだ。解釈学を復習する必要がある。
- (5) 学習指導の実際を参観しあう。高等学校同士の参観はもちろん、小学校や中学校の学習指導を参観する。
- (6) 地区の研究協議会を強化して、国語教育の問題について研究を深める。

(1)、(2)に国語教育についての理論的研究の必要性を述べている。教科書だけを忠実に勉強する時代から、教科書は資料の一部であるとする時代が変わって来ている。また国語の学力観にしても、覚える静的な学力か

ら活動する動的な力を学力と考えるようになっていく。新しい国語学習の目標設定のためにも、国語学習の要素としての能力表、経験表の設定を急ぐ必要があった。

(3)の教材研究を広く、細くすることについては、従来と変わらない専門的な国語・国文学的な学力を指導者に求めている。単元学習がすぐれたものであったとしても、指導計画が綿密に構成されていたとしても、指導者に学力がなくてはいかんともしがたい。指導者に国語・国文学的な学力がなくては、単元学習を完全に展開させていくことはできないのである。

(4)(5)(6)に教職教養の必要性を述べている。国語・国文学的な学力が必要であることはいうまでもなく、教室における指導技術が乏しければ、新しい高等学校の学習は進展しない。学習指導の技術的な研究の必要性を述べられ、小学校・中学校の国語教育に携わる人たちから示唆を得ようとしている。(6)にいう地区研究協議会の強化については、高等学校だけでなく、小学校、中学校の国語科担当者、研究者の参加した協議会を考えていられる。

## おわりに

増渕恒吉氏は、新制高等学校発足当時の国語科教育実践者として、教室の実践から得た結果をもとに、新制高等学校国語科教育のあるべき姿を模索した。そこから新制高校の当面している問題を取り上げて、目標、内容、指導計画、新しい国語の学力観について、自らの考えを提示した。

そこには戦後の高等学校国語科教育の実践を指導して大きく役割を果たした増渕恒吉氏の実践者としての考えが早くも、初々しい姿で示されていたと言ってよい。

## 参考文献

1. 増渕恒吉 「高等学校国語科のカリキュラム」『国文学解釈と鑑賞』171号 p. 61 (昭25. 8. 1)
2. 増渕恒吉 「国語教育の諸問題」『高校教育』24号 p. 26 (昭25. 1. 1)
3. 注1に同じ p. 62
4. 注1に同じ p. 62
5. 注1に同じ p. 63
6. 注1に同じ p. 63
7. 注1に同じ p. 63
8. 増渕恒吉 「高等学校国語の教育課程」『国語教育講座3』刀江書院 p. 104 (昭25. 11. 30)
9. 注8に同じ p. 104
10. 注1に同じ p. 63
11. 注1に同じ p. 64
12. 注2に同じ p. 26
13. 注2に同じ p. 27
14. 注8に同じ p. 109 (考察者において適宜まとめた.)
15. 注1に同じ p. 67
16. 注1に同じ p. 67
17. 注1に同じ p. 67
18. 増渕恒吉 「高等学校国語学習指導の諸問題」『実践国語』第2巻第12号 p. 18 (昭和26. 3. 1)
19. 注1に同じ p. 68
20. 増渕恒吉 「国語大学入試問題への要望」『高校教育』34号 p. 10 (昭25. 11. 1)
21. 注20に同じ p. 10
22. 注20に同じ pp. 11-14



〈参考〉

増渕恒吉氏略歴

明治40（1907）年11月5日栃木県那須郡烏山町中央2丁目1の26にて、清三郎・キノの四男として出生、荒物を商う大きな商家であった。屋号を「かねじゅう」と称した。

大正14年3月 栃木県立宇都宮中学校4年終了

4月 旧制山形高等学校文科甲類入学

昭和3年3月 同 卒業

4月 東京帝国大学文学部国文学科入学

同 6年3月 同 卒業

4月 岡山県吉備商業学校教諭

同 7年10月 神奈川県立横須賀中学校教諭

同 8年6月 『校注夜半の寝覚』（中興館）刊（藤田徳太郎共著）

同 13年9月 福井県師範学校教諭

同 16年4月 陸軍教授 陸軍予科士官学校教官

同 21年4月 東京都立第五中学校（現小石川高等学校）教諭

同 24年10月 東京都立第一新制高等学校（現日比谷高等学校）教諭

同 28年5月 『古典の解釈文法』（至文堂）刊（時枝誠記共著）

同 30年9月 『総合国語の新研究』（日本放送協会）刊

同 32年4月 東京都教育委員会指導主事

同 35年4月 同 指導部主査

同 37年4月 東京都立航空工業高等専門学校教授

同 43年4月 専修大学文学部教授

同 46年4月 『国語科教材研究』（有精堂）刊

同 53年3月 専修大学定年退職

同 5月 土浦短期大学教授

昭和56年3月 『増渕恒吉国語教育論集』上・中・下（有精堂）刊

同 61年2月12日 長逝

非常勤講師出講

昭和26年4月から昭和32年3月まで、横浜国立大学教育学部

昭和33年4月から昭和43年3月まで、東京大学教育学部

昭和43年3月から53年11月まで、聖心女子大学

この間

昭和23年4月から昭和46年3月まで、文部省学習指導要領作成委員

要 約

増渕恒吉氏は、「国語科の目標は言語能力の習得，言語技能の訓練と文学の学習にある。」とした。

国語科のカリキュラム作成上の留意点として，社会の必要性に応えること，生徒の興味と関心に応じるように作ること，知識を与えるのではなく，言語経験を与えるようにすること，四つの言語活動が総合的に学習されるように編成することなどを挙げた。指導法には単元学習法を取り上げた。しかし，教材単元を主とした単元計画がなされるべきだとした。

増渕恒吉氏は，国語の学力について，国語の知識だけでなく，豊かな言語生活のできる能力を学力と考えるべきだとした。高等学校国語科担当者は，国語国文学の研究だけでなく，教材研究，学習指導法などの教職教養の研究をなすべきだと自らの考えを提示した。

（1989年9月27日受理）